春日井たたら研究会　2019 年度 活動予定(研究発表・巡検) 素案

4/27(土)　総会・懇親会

5/18(土)　**在野** 古代製鉄族尾張氏と西山遺跡

6/8(土)　**小木曽** 濃尾平野の地質・変成帯・金属鉱床

夏・・・・　巡検① 高岡・射水方面

9/14(土)　実験準備①・・・・炉作り・炭割

10/12(土)　**牧野** 刀剣の構造と焼入れ技術
同日午後　実験準備②・・・・予備

10 月末　ハニワ祭り製鉄実験

11/9(土)　**青山** 金属材料の基本に関して

12/14(土)　**坂井・林** 岐阜方面の金属精錬
忘年会

1 月末　**長谷川** 戦前中国山地のたたら操業

2 月末　**市川** 永田式実験炉について

3 月　巡検② 岐阜県洞戸周辺銅山跡

春日井市長　伊藤太　様

要望書

春日井市西山遺跡への遺跡標識設置、及び同遺跡に関する追加調査の要望。

1,春日井市西山遺跡現場に古代製鉄遺跡の標識を設置して頂きたい。
2,現在覆土保存されている製鉄遺構に隣接する西北竹藪の追加調査をお願いしたい。

春日井市の西山遺跡は、今や全国的に注目を浴びている遺跡です。昨今の考古学の動向は、従来、等閑視されていた「鉄」への関心が急速に高まり、また、朝鮮半島での発掘調査の進展等とも相まって、新たなるステージへと移りつつあります。

古代の鉄生産は、組織的で大規模な生産体系であり、単なる工人集団或いは豪族単位では為し得ぬものであって、背景には国家の存在があります。春日井市西山も例外ではなく、春日井市にそれが存在するのは、当時の国家的意思が大規模に当地に展開したことの証しに他なりません。

平成16年に発掘調査が実施されて以来、待望された調査報告書も昨年公刊されました。今後更に、当遺跡への関心が高まることが予想されますが、実際には、遺跡を訪れても雑草が茂るだけで、初めて訪れる者にはその位置すら見当が付かないのが現状です。故に、遺跡の表示板設置を切望する次第であります。

更に、覆土保存の遺構から10m程離れた、西北の竹藪から、鉄滓が現在でも確認されています。これは第二の製鉄炉或いは溶解炉が存在する可能性を示唆しており、この確認は春日井市の歴史のみならず、全国レベルでの古代史認識が塗り替えられる要素を持っています。故に、この遺跡の追加調査実施を早急に要望します。

我が春日井たたら研究会では、当遺跡の発掘段階から深い関わりを持ち、今日に至るまで十数年間、当遺跡の啓蒙と、古代製鉄への認識を深める為の地道な活動と勉強を積み上げてきました。その成果として、この西山の製鉄遺跡が、東海地方で唯一現存する極めて貴重な古代製鉄遺跡であること、また、西山の製鉄炉は全国の製鉄炉遺構中でも極めて大型の製鉄炉に属し、これ程整然とした石組みの残存する状況は全国的にも稀有であること、更には、当遺跡が、灰釉陶器や瓦陶兼業窯ともリンクした規模の大きな総合熱生産施設の一環であった可能性が高いこと等を確信するに至りました。この確信に基づき、春日井市民の誇り得る文化遺産の顕彰の為に、平成27年に続き再度、春日井市教育委員会のご尽力をお願いする次第であります。

平成31年1月18日

春日井たたら研究会　　会長　　森　脩
代表幹事　　小木曽正明

尚、本件についての文責及び問合せ先は、以下の通り、小木曽を窓口とさせて頂きます。

春日井たたら研究会幹事　小木曽正明
487-0013　愛知県春日井市高蔵寺町6-7-4
TEL・FAX　0568-52-8234
携帯TEL　09051149835
Email　ogiso_m@ma.ccnw.ne.jp

2/19(火)の一つの資料として見ておいて下さい。これは『春日井市遺跡発掘調査報告・第８集』・「神屋第１号窯」1984の末尾に載る、発掘調査に関わった大下氏による窯址保存の要望文です。文中に①として埋蔵保存に触れ、「その位置地表にその旨を記した表示を行うこと」を述べています。これは埋蔵保存を行う際の当然の処置です。結果的には②の目に見える形の保存方法が採られましたが、その文中には「たとえ多くの困難事があろうとも」目に見える形で保存されるべきであることが強く主張されています。製鉄遺跡として東海地区で唯一残存する7C代の可能性の高い西山製鉄遺跡は、8C の神屋窯址以上に、恒久的保存対策が講じられるべきであります。これは大下氏の遺跡保存の見解と寸分変わるものではありません。

９　神屋第１号窯の保存について

大下　　武

神屋第１号窯発掘調査完了後，本窯の重要性にかんがみ，保存についての動きが，本市関係者を中心に表面化しつつあることは，周知の事実であります。また，その結果として，当事者である県企業庁に対し，県文化財課がその基本的立場から，ご尽力いただいている事も，つとに聞き及んでおります。それぞれの立場から生ずる諸困難点を十分理解しつつも，調査担当者としての要望を，ここに改めて述べさせていただきます。

土地造成工事は標高123ｍ以上の丘陵上部を削平する形で行われます。従って，それより約２ｍ余下位に位置する本窯は，さし当たり破壊をまぬがれます。当面の措置として，窯体内にコモ敷きした上，土による埋めもどしが行われました。これはいうまでもなく，一時的，緊急の対応であり，決して恒久的なものではありません。いまだ，保存が確定していない現時において，保存方法について言及することは，妥当を欠くかも知れませんが，いずれ対処すべき時が来る事は十分予想されますので，私見を述べておきたく思います。

◎　保存の形態……①　最も簡略な方法は，当初の工事計画に沿い，土盛り下に現状のまま埋蔵保存し，その位置地表にその旨を記した表示を行うことである。この場合，当位置に建造物等設置することは慎けられねばならない。この方法の最大の欠陥は，６ｍ以上の深さに埋め立てられるから，おそらくは，二度と日の目は見ないであろうし，ただ，破壊をまぬがれたというにとどまることである。従って研究者にとって，目に触れることのない保存法である。

◎　保存の形態……②　常時，見学可能な形での保存である。これには多くの困難が予想される。たとえば１．上端と下部との間に５ｍのレベル差があるから，階段等の付属施設を作るにせよ，相当の法面を必要とし，さらに，危険防止についても考慮されなければならない。また，窯本体の保存維持もやっかいな問題である。窯壁の風化・崩壊を防ぐため，固定溶液の注入等が開発されているものの，費用は膨大である。簡単な屋根を設ける程度では，美観の問題のみならず，やはり崩壊の進行をくい止めるのは無理であろう。２．さらに周辺環境との調和が問題となる。建物群の狭間に保存されたとしても，おそらく丘陵斜面と雑木林を連想する人はいない。点としての保存ではなく，ある程度面を有した保存が望まれる。その為には，すでに初期計画段階において，公園用地の問題などともからめながら，検討されねばならないであろう。

しかし，たとえ多くの困難事があろうとも，②　の保存法が最も適当であることはいうまでもない。1300年を経た歴史的遺産に対し，どう対処していくか，しかも，それ自体の学術的価値が十分認められているものについてである。壊すのはたやすい，復元も現代技術を以ってすれば不可能ではない。しかし1300年という歳月を取りもどすことは，永久に不可能である。このことだけは忘れてはなるまい。

①　の消極的保存がなされるのか，たとえ困難であろうと②　の方法がとられるのか，今は関係各位のご尽力を頼うほかはない。

岐阜たたら会研修

3月19日(火)

郡上市・関市の足跡を探る Ⅰ

1．星の宮神社
　美並ふるさと館
　美並苅安で鉄を探す

2．南宮神社（西神野）

3．南宮神社（下之保）

4．南宮神社（水成）

5．多々羅

6．間吹

7．弥勒寺

岐阜たたら会研修

5月6日(月)

関市武儀町の足跡を探るⅡ

両面宿儺（すくな）一つの胴体に二つの顔、八本の手足怪人の伝承と地名

1．高沢観音・日龍峯寺（たかさわかんのん・にちりゅうぶじ）

両面宿儺の伝承と鉄との関係

寺伝によると仁徳天皇の時代、飛騨の国の豪族両面宿儺が天皇に対面してその帰り、悪竜退治をして人々を救いこの峰に寺を建てたという。日本書紀では天皇に従わなかったので退治されたと、逆に伝えられている。

古代中国の伝説に登場する蚩尤（しゆう）が日本に伝えられ名を変えたのではないか。蚩尤の姿は入身牛蹄にして四目六手である。蚩尤は中国の山東半島に祀られてきた、鉄の神でもあり兵器の神でもあった。蚩尤信仰は日本に伝えられ、兵主（ひょうず）神という名で各地に祀られている。大陸から金属精錬の技術を伝来した人達の信仰が両面宿儺になったのではないか。

「水と犬と鉄　尾関章著　古代の中濃とムゲツ氏」

2．祖父川（そぶかわ）

地名で鉄の錆（さび）が元になっているのではないかということで、川を歩いて鉄鉱石を探す。

3．暁堂寺（ぎょうどうじ）

創建は古く平安時代にさかのぼる。天台宗に属し「円通寺」と称したが、文永年間（1264年～ 1274年）火災により本尊を除き伽藍を消失したと伝えられている。宝永2年（1705年）今須の暁堂和尚が再建し暁堂寺と改め、曹洞宗のお寺として現在に至っている。

本尊は、昭和45年に関市の重要文化財に指定された一木眼の「聖観世音菩薩」（立像・平安佛）寺伝によれば、両面宿儺が八賀の里からこの地に来て一夜の宿りをした折、夢枕に金竜が昇天する姿を見、お告げを聞き高沢の日竜峰寺に安置する観音像と同木を用いて像を刻み安置したと伝えられる。

境内には、両面宿儺が夢見た「金龍」が出現したという小さな池がある。今年は7年に一度の開扉法要の年にあたり3月に写真撮影をすることが出来た。堂前には高沢観音と同様「千枝檜」が植えられ、樹下の古墓は宿儺の従者の墓だといわれている。

2019年

―― 本セミナーは今年で１９年目になります ――

古代史市民セミナー

―― 後援 ―― 名古屋市教育委員会 ―

日／曜	テーマ	ひと言　―紹介―
５月22日(水)	大和政権樹立と 諸勢力 (東山)	政権樹立の年代と勢力図
29日(水)	「古代戸籍と律令社会」 (島田)	最古の戸籍が残る富加町からの報告
６月７日(水)	「庄内川と古墳」 (服部)	志段味古墳群から尾張の古代を考える
１２日(水)	「元号とは？そして干支」 (西部)	元号の意味と暦・干支を考える

【講　師】

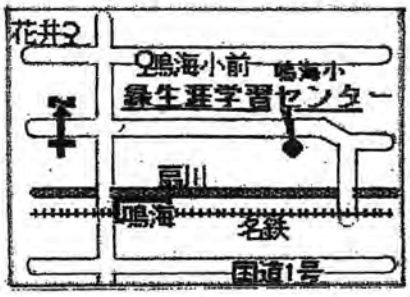
島田崇正・岐阜県富加町教育委員会
服部哲也・(前)名古屋市教育委員会
西部賢一・古代史研究家
東山勝也・古代遊学会代表

セミナーの会場内

所：名古屋市緑生涯学習センター

時：午前10～12時

全４回　３０００円



古代遊学会

主催
〒458―0801　名古屋市緑区鳴海町山ノ神125―5
Tel・Fax　０５２―８９１―２１８２
(携帯)　０９０―３５５４―５０９５

鍋原　鉄嶺峠。

三重県＝（北伊勢だけに限定して）金山　丹生川　金谷　金井　鍋坂　小倉　穴太。

福井県＝（越前に限定する）金草岳　鍋倉山　倉ノ又山　小倉谷　手倉山　田倉川　高倉峠　高倉山　藤倉山　金柏　金谷　風尾　赤谷（二箇処）丹生　金見谷　炭焼　金山　平吹（上・中・下）鍋ケ平　上・下金屋　金津　丹生ケ岳　赤谷山　鋳物師。

以上のほかに、小字の名まで対象とすれば製鉄関連の地名の数は倍加するであろうが、それは読者に徒らな退屈を強いるだけだから避けよう。しかし、そうした退屈が考えられるにもかかわらず書いておくことを避けてならないのは、伊吹山系の東を流れる、西美濃と風土的に固く結合している大河揖斐川の名についてである。「揖斐」の名は「イビッ」「ヘシ」に通じ、ゆがんだ四辺形や菱形を指す言葉であるが、福士幸次郎氏はこれが「鉄分を含んだ赤い泥」をよぶ場合もあるといい、「鉄に関して沿岸におびただしい遺跡があり、その上流に南宮大社のあるところの揖斐川は、おそらくこのイビジの『ジ』音を脱落したのである」と書いていることを思い出す。この川と似た名をもつ飯梨川がある（島根県）。その上流域に「鉄有り」と『出雲風土記』が書いているほど古来知られた鉄産地の中を流れる川であるが、福士氏はこの名の「イイシ」が揖斐川の「イビ」と同根だという。[109]

それにもまして揖斐川と同名異川というべきだと私が考えるのは、飯梨川と同県内の製鉄地帯を流れる斐伊川である。斐伊川は古くから簸川、あるいは簸ノ川とよばれ、今でもその流域は簸川平

野という。歴史作家司馬遼太郎氏もいっているように、古代語の「ヒノ」川という言葉は、鉄と特別に深い関係をもっていたらしいと思われる。それが証拠に、斐伊川と源を同じくする日野川は東の伯耆製鉄地帯を流れ、斐伊川は西の出雲製鉄地域を流れる。またさきに述べたように、越前にふ地帯の日野川も製鉄関連の名をもつ山々の裾野を流れており、その流域には現在に至るまで冶金工業地が存続しているが、そうしたことからも、これらの三川がいわば「鉄と結ばれた川」として共通していることは否定できない。

「鉄と結ばれた」ヒノ川に、「イ」を接頭語として加えればイヒノ川となり、イイシ川とも通じるか、音便によってイビ川となる。逆に、イビ川の「イ」を接頭語とみて省略すればビノ川、すなわちヒノ川となる。日野川、簸ノ川、揖斐川・飯梨川の名は互に相通じあい、共に「鉄と結ばれた川」であることを名乗る。そして福士氏が指摘しているように、揖斐川流域では製鉄遺跡を散見することが多いが、それと共に流域に西美濃の有名な古墳群が集っていることもまた見逃がし難い事実である。

私が読者の煩わしさを覚悟しながらも、製鉄に関連する地名や山川の名を列挙することを避けかねているのは、伝来の古い地名は永いその地の住民生活と密着しているために、そこに民衆の生活が凝集している貴重な文化遺産だからである。谷川健一氏がいったように「地名は学際的な萃点で、民俗学、歴史学、言語学、国文学――これまで結びつくことのなかった様々な学問を、地名を通じて一つに結びつけることが可能である」[110]ので、各学問の領域の中で研究が進んでいない古代伊吹製

地帯を中心に探してみよう。その際あらかじめ説明しておく必要があるのは、「蔵」または「倉」と、「赤」「黒」という言葉・文字の意味についてである。『日本古典文学大系＝日本書記』の註が特に示しているように、本居宣長以来知られているとおり、「クラは谷、朝鮮語のコル、満洲語のホロ（いずれも谷）と同系語　クラとは産鉄場のことであり、それは帰化人部落に属するものであった」と考えられてきたから、「蔵」「倉」ときとして「来」は明白に製鉄関連地名として扱うべきものである。これに付随してさらにいえば、鼻の穴を「ほじくる」や「くじる」「いじくりまわす」などに共通する「くる」も、「クラ＝コル…ホル＝ホロ」につながり、谷・製鉄、そして穴を刳ることと結びつく。修行のために峰々を巡行することを重視する修験道真言宗の寺院の山号・寺号に蔵や倉の字が見られるのも（谷汲山華蔵寺・その近くの横蔵寺＝美濃など）、このためと考えられよう。

さてそうした知識をもったうえで、改めて江・濃・越にまたがる伊吹山系を中心とした地帯のめぼしい製鉄関連地名を拾い集めて見よう。もちろんその起点は伊吹山であり、そこから北へ金糞岳、上蔵岳、安蔵山そして金草岳、倉ノ又山へと一〇〇〇メートル前後の山々の峰と谷が連らなる。金草岳は南の伊勢湾に注ぐ揖斐川と、北の日本海へ流れ落ちて九頭竜川に合流する日野川という二つの川の源流地であるか、もとは間違いなく金「糞」岳であったであろう。糞の字が嫌われて草に書き替えられたにすぎない。金糞は製鉄の際にできる鉄滓だから、ものの役にはたたないにしても、製鉄集団にとっては卑しいとか汚らしいものではなかった。だから彼等は憚かることなく平気で金

糞岳とよび、近江ではそのまま現在に続いている。

金糞岳の糞の字を忌み嫌ったのは、その麓に住む農民たちだったのであろうか。農民にとって糞は重要な肥料であるから、それを忌むことは矛盾しているように思われるが……。現に平安時代に入り熊野三山の巡拝が流行し、「蟻の熊野詣で」といわれるほどに人の列が熊野路にあふれた時、沿道の農山村では、参拝行列の後に残る糞の帰属が紛争の種になったほどである。それにもかかわらず金糞岳の名は嫌われた。同様の例は川の名にもみられる。例えば美濃大垣の南で牧田川に合流する一支流は金屋という土地の横を通っているから、金屋とよばれたこの土地の鍛冶屋の作業場から金糞が流れ込むために、初めは金糞川といわれたであろうが、今は金草川という名に変っている。金屋と金草川の近くに、鉄や鉄銹を指す古い言葉のソブに因む祖父江という地名が二箇処、釜段、金廻、赤目の集落が点在しているのも偶然とはいい難かろう。

伊吹山系とそれに連接する越前山地一帯にある主な製鉄関連地名は次の通り。

滋賀県＝（湖北を重心として）　鍋尻山　丹生（伊香・坂田両郡に）　金居原　鍛冶屋　穴師
高倉　小倉谷　斧磨　金屋（愛知郡・八日市市）　金沢　金田　鋳物師　吹気　金谷　向ノ倉
朝倉　甲頭倉　矢倉川　金勝川　丹生川　吹谷。
岐阜県＝（美濃西部に限定して）吹谷　祖父谷　金糞山　金掘場　腰釜　金生山　さきに挙げた
金屋とその近辺　鍛冶谷　鐘鋳場　釜ケ谷山　魚金山　金原　金坂峠　本倉　白倉谷　雷倉　塔
ノ倉　倉元谷　金見谷　芦倉山　雛倉　大倉谷　廉倉谷　倉ケ谷　祖父江　伊吹　金廻　根尾

初夏

司馬光（北宋一〇一九―一〇八六）

四月清和雨乍ち晴れ　南山戸に当たって転た分明
更に柳絮の風に因って起こる無く　唯葵花の日に向かって傾く有るのみ

【本文】

初夏

四月清和雨乍晴　南山當戸轉分明
更無柳絮因風起　唯有葵花向日傾

【通釈】陰暦の四月は、天気もよく穏やかで気もせいせいする。雨が降ったかと思うとすぐに晴れあがり、南の方の山々は戸口からまっすぐに、いっそうはっきりと見える。白い綿のような柳の実も、風のために飛び散ることもなく、ただ美しいひまわりの花が太陽に向って、いっそう美しく咲いているばかりである。